プロタゴラスとヒューマニズム

藤井義夫

『國制について』(Περὶ πολιτείας)
『名譽慾について』(Περὶ φιλοτιμίας)
『諸德について』(Περὶ ἀρετῶν)
『原始社會の組織について』(Περὶ τῆς ἐν ἀρχῇ καταστάσεως)
『黃泉に住む人々について』(Περὶ τῶν ἐν Ἅιδου)
『人間どもの不正なる行狀について』(Περὶ τῶν οὐκ ὀρθῶς τοῖς ἀνθρώποις πρασσομένων)
『訓令書』(Προστακτικός)
『報酬に關する訴訟、反論二卷』(Δίκη ὑπὲρ μισθοῦ, Ἀντιλογιῶν α' β')[2]

さらに『大論』(Μέγας λόγος)と題する著作から教育に關する二つの斷簡が保存され、またポルフィリオスは『存在について』(Περὶ τοῦ ὄντος)という書物を讀んで

二

プロタゴラスの思想をかれ自身によって書かれた著作から知ることは、それらがすべて失われてしまった現在では、ほとんど絕望的に困難である。かれの主著は、すでに觸れたように、かの homo mensura dictum を冒頭の言葉とする『眞理論』(Ἀλήθεια)ないし『打倒論』(Καταβάλλοντες)であるが[1]、ディオゲネス・ラエルティオスは、プロタゴラスを無神論者として刻印づけた『神々について』(Περὶ θεῶν)のほかに、なお次のような著作をかれのものとして引用している。

『爭論術』(Τέχνη ἐριστικῶν)
『角力について』(Περὶ πάλης)
『數學について』(Περὶ τῶν μαθημάτων)

それを暗記したと傳えている。[3] しかしたとえそれらがすべてプロタゴラスの眞作であったにしても、それらを直ちにそれぞれ獨立した著作と解することはできない。というのはそれらは他の著作の拔萃か、もしくは共通の論題（communes loci）に對するプロタゴラス的辯論の技法を演示するためのモデルとみることもできるからである。從ってウンターシュタイナー教授がきわめて手際よく論證しているように、プロタゴラスに歸せられる著作は『眞理論』と『反論』との二つであって、後者はさらに、（一）神々について、（二）存在について、（三）法律およびポリス的世界に關する諸問題について、（四）技術について、の四つの問題群から成り立っているとも解釋することができるであろう。[4] けれども、これらすべてにもかゝわらず、プロタゴラス自身の言葉としてわれわれに傳えられているのは、

「萬物の尺度は人間である。有るものどもについては有るということの、有らぬものどもについては、有らぬということの」

というかの周知の「人間尺度論」、さらに『神々について』の卷頭言といわれている次の言葉、すなわち

「神々については、かれらが存在するということも、存在しないということも、またその姿がどのようなものであるかということも、知ることはできない。なぜならそれを知ることを妨げるものは多いから、すなわちそれは知覺することができないのみならず、人間の生命も短いから」[5]

および教育に關する次のような數句にしか過ぎない。

「教育は天性と練習とを必要とする。」

「若い頃から始めて學習をつまねばならない。」[6]

「技術は練習を伴わなければ、また練習も技術を伴わなければ、無駄である。」[7]

まさしくそれ故に、プロタゴラス學説の――とくにわれわれの主題の核心をなすところの「人間尺度論」の――眞相を明かにするためには、他からの信頼すべき證言が必要となる。傳統的な解釋に從えば、そのほとんど唯一の權威ある證人がプラトンであり、さらにその言質を確認しているのがアリストテレスなのである。すなわちプラトンは『テアイテトス』において、同名の主人公が知識を感覺であると定義したに對して、プロタゴラスの「萬物の尺度は人間である」という言葉を援用しなが

ら、ソクラテスをしてそれをおよそ次のように敷衍せしめている。

それによってかれが言おうとしているのは、このようなことではないか。それぞれのものは、わたしにとっては、それが私に現われているような性質のものとしてあり、また君にとっては、それは君に現われているような性質のものとしてある。そして人間とは君や私のことではないか。たとえば吹いている風そのものは同じでも、私たちのうち或る者は寒氣を感じるが、或る者はそれを感じないことがあるのではないか。ではその場合にそこに吹いているものは、私たちとは無關係にそれ自體で冷いとか、冷くないとか主張すべきだろうか。それともプロタゴラスに従って、それは寒氣を感じる者には冷いが、そうでない者には冷くないと言うべきだろうか。（後の説に従うとすれば）その風は兩者にそれぞれそのように現われているのではないか。ところでその現われている（φαίνεσθαι）というのは、ひとがそれを感じている（αἰσθάνεσθαι）ということであろう。従って冷いとか溫いとかいわれるようなすべてそのようなものにおいては、ものの現われ（φαντασία）とその感覺（αἴσθησις）とは同じものになる。すなわちそのようなものは各人が感覺しているように、また各人にとってありもする。従って感覺はつねにあるものが對應するから、それは、僞りのないものであってその點は知識そっくりなのである。

ところでこれは容易ならぬ言論だ。というのは、何ものも他のものとは無關係にそれ自體で一定のものであるのではないからだ。君は何ものをもなにとか、なにかの性質のものと正當には呼ぶことができないであろう。もし君がそれを大きいものと呼ぶなら、それはまた小さいものとしても現われるであろうし、また重いものと呼ぶなら、輕いものとしても現われるであろう。あらゆるものがかくのごとくであって、むしろすべてが場所的な運動や一般的な動きから、また相互の混合からなっている。そしてわれわれはこれをあると言っているけれども、それは正しくない。なぜなら何ものもいかなる時にもあるのではなく、つねになるのだから。そしてこのことについてはパルメニデスを除くすべての智者たちが相並んで同一の歩調をとっているとみらるべきである。プロタゴラスとヘラクレイトスとエムペドクレス。[8] というのはヘラクレイトスの「あたかも流れるものゝごとく萬物は動いているのだ」というのも、プロタゴラスが主張する「すべてのものの尺度であるのは人間だ」ということも、さらにテアイテトスの「感覺は知識だ」という斷定も結局同じことに歸着するからだ。[9]

これに對してソクラテスが投げかけた次のような疑問は、後世のプロタゴラス解釋にとって決定的なものとなった。

それは「おのおのものに思われていること、そのことはまたそうありもする」ということを説くことにおいて、あの人はほかの點は私にとってたいへん面白かったのです。しかしその論の初めが私にはどうも不審なのです。なんだってあの人は、あの『眞理論』を始めるにあたって、「萬物の尺度は豚である」とか「狒々である」とか、いや、感覺をもつものである限り、何かもっと奇妙なものを擧げなかったのでしょうか。そうすることは、あの人がわれわれに向って辯論するのに、辟頭にまず豪氣な風をし、またひどく輕蔑的な調子を出すためにも效果的だったでしょうに。つまり、それによってあの人は、われわれがあの人を智者だといって、まるで神様のように驚嘆していたのに、あにはからんや、當のその人は、思慮の深さにかけては、誰かほかの人間はおろか、蛙の子のおたまじゃくしに比べても、少しもまさってはいなかったのだということを示すわけですから。それともわれわれはどう言ったらよいのでしょうか。なぜならもし本當に何でも各自が感覺を通して思いなすところのものは、各自にとっては眞なのであるということであるなら、またものが他から作用を受けた場合に、そこに受けとられたものを、その者よりも他の者の方がよりよく判定するとか、あるいは思いなしの正か僞かを檢査する權能は、當の者よりもむしろ他の者の方に屬するとかいうようなことが、もしないとするなら、むしろ各自の思いなすところのものはたゞひとり各自自身がこれを思いなすのみであって、しかもそこに思いなされていることは皆ことごとく正しいのであり、眞なのであるならば、そもそも何故にプロタゴラスは智者であり、從ってまたそれは正當なことになるわけですが、他の者どもの師として尊敬せられ、かつ、多額の謝禮金まで貰っていたのでしょうか。これに反してわれわれは、各人各自の智慧の尺度であるにもかゝわらず、何故に學識の劣った者として、かれのもとに出入して教えを受けねばならなかったのでしょうか。[10]

ほゞ同じプロタゴラス解釋は、明かにプラトンの影響の下に書かれたと推定されるアリストテレスの『形而上學』巻四（Γ）の一節からも知ることができる。というのはこの哲學者はいわゆる矛盾律の論證も否定も不可能であると述べ、それに反對する人々を論駁した後に次のように論じているからである。

この同じ見解からプロタゴラスの説も出ている。そして必然的にこれら兩説はひとしく眞であるか、あるいはひとしく僞であるかである。なぜならもしそう思われまたそう現われる通りがすべてそのまゝ眞實であるならば、必然的にこれらすべては眞でもあり、また同時に僞でもあるから。というのは多くの人々は互に相反する判斷をしており、そしてそれぞれ自分と反對のことを思いなしている人々を僞だと考えている。從って同じものがそうありまたそうあらぬわけである。しかしもしすべてがこのようであるとすれば、當然すべて思

われていることは眞實であるはずである。なぜなら僞の判斷をしている人と眞の判斷をしている人とは互に反對のことを思いなしているわけであるが、事實がそのように反對であるなら、すべての人は眞の判斷をしているわけだからである。[11]

まさしくこゝにわれわれは相對主義、主觀主義などの極印を押された傳統的なプロタゴラス像の成立をみるであろう。

（1） 本誌、第四十卷、第三號、一〇頁。Platon, Theaetetus 152 A, Sextus Empiricus, adv. math. 7, 60.
（2） Diogenes Laertius, IX 55.
（3） Diels-Kranz, Die Fragmente der Vorsokratiker[6]. 1952. 80. Protagoras. B 2, 3
（4） M. Untersteiner, The Sophists, transl. by K. Freeman. 1954. p. 9 ff. Le Antilogie di Protagora. Antiquitas, II-III, 1947 f.
（5） Diels-Kranz, Frag. 80 B 4 (Eusebius Caesariensis, Praep. Evang. XIV 3, 7. Diog. Laert. IX 51).
（6） Ibid. 80 B 3 (Anecd. Par. I 171, 31 de Hipponmacho B 3).
（7） Ibid. 80 B 10 (Stobaeus, Flor. III 29, 80).
（8） Theaetetus 152 A-C. この對話篇の譯文は主として田中美知太郎教授のプラトン『テアイテトス』（岩波書店、昭和十三年）および『プラトン』（筑摩書房版、世界文學大系3、昭和三十四年）によった。
（9） Ibid. 160 D.
（10） Ibid. 161 C—E.
（11） Metaphysica Γ 5, 1009 a 6—15. 主として出隆氏の譯文（アリストテレス『形而上學』上、（河出書房、昭和三十一年）によった。

三

しかるにこのような論難に答える「プロタゴラスの辯明」なるものを、プラトン自身がソクラテスの口を藉りて語らしめている。それはシラーがかれのプロタゴラス解釋の最も本質的な典據として取りあげ、『プラトンかプロタゴラスか』（一九〇八年）においてそれを周到に基礎づけ、さらに著名なプラトン學者バーネットの批評に答えて、『マインド』誌上において、かれの論旨を確言するために擧證を重ねたところのものである。[1] それ故われわれは煩をいとわず、次にその全文を掲げておこう。

かれ（プロタゴラス）はいま言われたことで、およそ私たちがかれに味方して言っている限りのものは、むろんみんな述べるであろうし、また私たちを輕蔑しながら、次のようなことを言って、ぶつかっても來ることだろうと思う。

一　見たまえ、この人の好いソクラテスはたれか小さな子供をつかまえて、「同じ人が同じものを（記憶し）思い出していて、また同時に知らないでいるということはありうるだろうか」などとたずね、その子がこれは容易ならぬ問題だと思って、そしてそう思ってから、先を見ることができぬために「否」と答えたら、もうそれでこの私というものをその言論でもって笑いものにしてみせたのだ。しかし、ソクラテス、さりとは君もずいぶん氣樂千萬な男だね。それは實際はこうなんだよ。いま君が問い手となって私の何かを調べてみる場合に、その問をかけられる者が、もしまさに私が答えるであろうような答えをして、それでやっつけられるのならば、それは私が論破されたことになるが、しかし私の答えそうにもないことを答えてそうなったのでは、論破されるのはたゞその問をかけられた者だけなのだ。それというのは、まずたとえば、かつて作用を及ぼされて受けとったことのあるものを、ひとが記憶し思い出している、その記憶（思い出）というものは、ひとがもはやその作用を受けていない時にも、なおその作用を受けていた時のような、なにかそうした受動の情態のまゝで現にその人のところにあるのだなんて、そんなことを誰かが君に贊同するだろうと思っているのか。とんでもないことだ。あるいはまた同じ人が同じものを知っていて知らないということがありうるなどとは、躊躇して同意しないだろうと君は考えているのか。つまり、もしいやしくもかゝる同意を容易ならぬことと思うならば、「およそひとが同じからぬようにとなりゆく者でありながら、それがそのようになりゆく以前にあったところのそのものと同じ者である」ということの承認をいつかは與えることになるだろう、と君は思っているのか。いや、むしろそれは「ひとが（なりゆく者とか同じ者とかいうように）單數で示される一定の者であって、複數で者どもと言われるようなことはないのだ」ということの承認を豫想するわけのものだと言えるのである。しかもその複數で者どもと言われるのは、いやしくも同じからぬようになりゆくということが（引き續いて）なりゆくならば、それは數限りない者どもになりゆく――というこの言い方は、互に言葉尻を取られぬように用心することが、もしほんとうに必要であろうならば、その場合しなければならぬ言い方なのだが――そういうはずの者どもなのだ。だが、まあ、それよりも、君は結構な人なのだ。もっと品位のあるやり方をしてはどうだ。そして直接私の言論に向かってきて、できるなら「これは間違っている。われわれの各個になるところの感覺は、決して各個にだけ特別になるものではない」とか、あるいは「たとえ各個にだけ特別になるものだとしても、それだからといって、そこに現われているものが、それにかくそれが現われているところのその者にのみなるのだとか、あるいはまた、あるという語を用うべきものだとすれば、あるのだとかいうようなことは決してあるまい」という論駁をやりたまえ。それを豚だの狒々だのを話のなかに持ち込むなんて、それでは君自身が豚の行いをしているというものだ。いや、それだけならまだしも、聽き手まで口説いて、豚のような行動を私の書いたものに對してやらせようとしていること

になる。褒めた話ではない。

二　すなわち私の主張というものは、たしかに眞理は自分が書いた通りであって、われわれがそれぞれあるもの、あらぬものゝ尺度なのだが、しかしその各個にとってあり、また現われているところのものは、甲と乙とではそれぞれ違っているからして、まさにこの點において、各個と各個との間には非常な差別があるのだということになる。そして智および智者の存在を否定するというようなことは、自分の思いも寄らぬことである。それどころか、いまわれわれのうちの誰かに現われ、したがってまたあるところのものが不良であるとして、この者のためにこゝに變化をもたらして、それに優良なものが現われ、またあるようにする者がいるなら、まさにその者こそ智者であるとさえ言いもしているのである。だが、こゝで私が言っていることを、さらにまた語句の上で追求したりしないでくれたまえ。それよりは、私の言おうとしていることが何か、いま説明するから、それでもってなおもっと確實に理解してくれたまえ。いゝかね、前にどんなことが言われていたか想い起してみたまえ。すなわち病氣の者にはその口にするところのものが苦いものとして現われ、また苦くあるけれども、健康の者にはその反對があり、また現われると言われていた。さて、この兩者はいずれもこれ以上に智なるものとなすべきではない。なぜならばそれは不可能でもある。また病氣の者はかくのごときものを思いなすが故に智なき者であるとか、健康の者はこれと異るものを思いなすが故に智者であるとか、そんな風に決めて言うべきものでもない。たゞなすべきは體の具合はその一方（すなわち健康體）の方がよいから、その一方のものへ變化させるということである。そして教育においてもまたそうであって、なすべきは、身の持ち方をその一方から他のよりよい持ち方へと變化させることである。ただ異るところは、この變化をもたらすのに、醫者は藥品を用いるけれども、ソフィストは言論を用いるのである。では何故に教育においてもまたそうであるのかというに、それはたれか虚偽を思いなしている者が、後になって眞を思いなすように、何びとかによってなされるというようなことは少しもなかったからである。なぜならばおよそあらぬものを思いなすということはありえないし、また作用を及ぼされて受けとるところのものにそむいて、これと違うものを思いなすということもありえないのであって、むしろこゝに受けとられるもの（すなわちそれぞれの感覺）はいつもそれぞれの場合において眞なのだからだ。これに反して、思うに、精神の持ち方の劣悪なために、それと同種のものを思いなしているものが、ひとの力によってその持ち方を良好にされ、そのため同様にやはり良好なもっと別のものを思いなすようにさせられるということはあったのである。そして丁度この後者として現われているものを或る人は事情に通じないために、眞なるものと呼んでいるが、自分はしかしその一方を他方のものより良いものだとは言うが、しかし決してより眞であるとは呼ばない。そしてこれらの智者を、親愛なるソクラテスよ、蛙なみに言いなしたりする所存は私にはないのである。いな、身體に關しては、それを私は醫者と

言い、植物に關しては、それを農夫と言う。すなわち私の主張では、後者もまた植物の何かが病氣にかゝっている場合、これのために劣悪な感情を取り除いて、眞であることは言うまでもないが、なおその上に、良好でかつ健康な感覺がその中に生ずるようになす者なのである。これに對して智慧のある卓越した辯論家というものは、國家にとって不得策（拙劣）なものが（法律上）正當であると思われることなく、良好で有益なものが正當と思われるようになす者なのである。それというのは、とにかくいかようなものであっても、各々の國家に正當であり、美風であると思われているものは、その國家がそれをそうであると認めている限り、その國家にとってそうありもするのであるが、しかしこの方面にも智者があって、それは國民にとってそれぞれ劣悪であるところのものの代りに、良好で有益なものが（正當なものとして、また美風として）あり、かつ、思われるようにとなしたのである。そして同じわけでソフィストもまた、教育される者をそういう風に教導することができるから、一個の智者なのであって、教育を授けられた者たちからすれば、多額の金錢を提供するだけの値うちのある者なのである。そしてかくの如くにして、人と人との間には智の優劣というものが存するのではあるが、しかし虚偽を思いなすという者は一人もいないのである。だからして君も、一個の尺度であるということには變りはないのだが、これは、欲すると欲せざるとにかゝわらず、我慢してもらわねばならぬ。なぜならその「人間が萬物の尺度だ」という説は、以上でもって首尾よく救われることになるのだから。

三　それとも、この説に對して、根本から異議を申し立てることができるならば、申し立てゝみたまえ。それは、以上に對抗して、辯論をもって詳細を申し述べるもよし、また質問によっても差支えはない。なぜならこれもまた忌避すべきではなく、むしろ心ある者なら、進んでまず何よりもこの方法を追うべきものだから。たゞそれにはこういう注文がある。つまり、質問の中で不正をするなということだ。德に心がけていると言っている者が、言論の中で始終不正なことばかりしているというようなのは、甚だ不合理なことだ。ところでこういうことの中で不正をなすというのは、競爭で掛合をやるのと、問答で言論を展開するのとの區別を亂す場合がそうなのであって、すなわち本來前者なら、遊戯を事として、できるだけ擧げ足とりをするところであるし、また後者――の問答で言論を展開する場合――なら、それは眞面目にやって、問答相手の失策も、たゞ相手が自分自身でか、あるいはそれまでの交際のおかげで、すでに自ら見當を違えていた者だけに限って、これを指摘して、それでもって相手を正道に引き戻すようにするところなのである。というのは、これを君がもしこうするならば、君の相手は、自分たちが混亂と困惑とに陷っても、これを自分自身のせいにして、君のせいにはしないだろう。自分自身をいとわしく思うであろうが、君には隨喜するであろう。そしてもっと別のものになろう、これまで自分があったところのものから解脱しようとする目的で、いとわしい自分自身から逃れて、智慧を慕い求めること

になるであろう。それをもしあの大多數の者がなしているように、これの反對を君がなすならば、君はこれと反對の結果を得るだろう。つまり、君はかゝる交際の相手を智慧の愛求者となす代りに、後年かくの如き業を仇敵視するところの者として現わすことになるだろう。だから、もし私の言うことが成程とわかるなら、さきにも言ったことだが、君は敵對心や爭鬪心をすてゝ、和らいだ理解をもって、われわれが「すべてのものは動いている」とか、「各個に思われていることは、その各個が私人であっても、公共體であっても、各個にとってもまたそうありもするのである」とかいう意見を出すことによって、そもそも何を言おうとしているのであるかということを、われわれと一緒の立場まで降りてきて、それこそ本當によく見るようにしてくれなければいけない。そしてそれを基礎にして、そこから知識と感覺とが同じものであるか、それともまた違ったものであるか、さらによく見るようにしてもらいたいものだ。だがさっきのように、語句名辭の慣用によって、そこからやったりするのはごめん蒙りたい。あの大多數の者どもが互に種々の言論上の行き詰りを與え合っているというのは、この語句名辭の類をでたらめに牽強しているところにあるのだからだ。

以上が、テオドロス、あなたの仲間に捧げた私（ソクラテス）の精一杯の助勢なのです。もとより手持ちの貧弱な私のことであるから、貧弱なことしかできないが、もしあの人（プロタゴラス）自身が生きておったなら、もっと堂々の陣容をとゝのえて、これら自分の軍に加勢したことでしょう。[2]

この辯明は、その前後の脈絡から推知しうる限りでは、その當時弟子たちの間で行われていたプロタゴラス主義を代表せしめようとしたものか、もしくはさきに提起された「人間尺度論」に對する種々の論難を、できるだけプロタゴラス自身の立場から答辯せしめようとしたプラトンの好意的な創作であるようにみえる。しかしもしこの辯明をアブデラ生れのこの偉大なソフィスト自身に歸しえたならば、われわれは歴史的なプロタゴラス主義についてなお多くを語りえたであろうし、またそこから新しい人間主義的な思想の發展を期待しえたであろう。シラーが『プラトンかプロタゴラスか』を主題とするきわめて野心的な論文において試みようとしたのは、まさしくこのことであった。すなわちかれがそこで與えようとした結論は次の五つのことがらである。

（一）この演說は主觀に對する知識の對象の相對性についてのプロタゴラスの偉大な發見を擁護した眞正の論議を（プラトンが理解した限りにおいて）與えるために企てられ、そしておそらく相當の程度までそれを與えることに成功している。

（二）というのは、もしそれがプラトンの作りごとであると看做されるならば、かれは自分自身を反駁していることに氣がつかなかったという非常に馬鹿げた結果になる。

（三）それはプラトンがそのことを理解しなかったということを示す內的な證據を含んでいる。

（四）それ故に、それは歷史的なプロタゴラスの現實の教說を再構成しているということに對する信賴すべき證據をもたらす。

（五）このことはプラトンが同じ對話篇において空しく取り組んでいる眞理や誤謬の問題の解決を現實に含んでいるという事實によって確認される。(3)

というのは、われわれと同樣プラトンも不運であって、かれは「人間尺度論」の脈絡も根據も知らなかった、ということがありうるであろうか。プロタゴラスの眞理に關する書物はアテナイ人の迫害によってすべて焚書の厄に遭い、プラトンによって閱讀さるべく一部も殘されなかったであろうか。「プロタゴラスの演說」に伴われている遲疑と釋明の態度はこのことを示唆しているようである。しかしプラトンがその書物の實體を熟知していなかったとは信じがたい。それは四一一年（もしくは四一二年）に當時の最も著名な教師の長い閱歷の成果として、アテナイで刊行されたが、そのときプラトンはすでに十代の半ばを過ぎていた。もしかれがすでに哲學に興味をもっていたとすれば、かれはそれを自分で讀んだか、尠くともそれについて論議されるのを聞いたに違いない。たとえかれが哲學に興味をもっていなかったにしても、かれはそれを讀んだ何十人かの同時代人を、またそれが議論されるのを聞いた何百人かの人をもったに違いない。というのは民主主義の時代にはいかなる彈壓も獨裁政治の場合のような機敏さをもつことはできないからである。またプロタゴラスはヘラクレイトスのような世捨人ではなく、最も人氣のある教師であり、さらにかれの議論は記憶しえないほど幽玄なものではなかった。從ってプラトンは、たとえ原本から直接にではないにしても、きわめて正確にプロタゴラスの本當の議論を確かめえた筈である。もしそうであれば、プラトンは何故にそれをさし置いて、プロタゴラスのために架空の議論を揑造する必要があったであろうか。

またもしプラトンがプロタゴラス演說を發明したのだ

とすれば、かれは論争に都合がよいように、それをもっと上手に處理したにちがいない。尠くともかれは結局ソクラテスが反駁しなかったようななにごとかをプロタゴラスの口に上せない工夫をしたであろう。從ってもしその演說の中に『テアイテトス』が反駁していないような議論が見出されるとすれば、それがプラトンの發明でないことは確かである。

すでに明らかにされたように、この演說は三つの部分から成り立っている、とみることができる。第一に、プロタゴラスはソクラテスの末梢的な言葉の詮議に對する抗議から始め、たとえば同じ人が同じものを知りまた知らないということは、事物が異った關聯で捉えられるならば、決して不合理ではないと主張する。第二に、各人はその人にとって眞であるものの尺度であるけれども、それは或る人が他の人よりもずっとよくあることを否定するものではない。賢者とは事物がわれわれにとってわるいと思われそしてわるくあるとき、それらをよいと思われそしてよくあるようにすることができる人である。そしてあたかも醫者が藥を用いて病人を健康體に更改させるように、ソフィストは言葉を用いて魂のよりよい狀態を作り出すことを任務とする。このように人を正しく感覺するように訓練することに對して、かれが報酬を受けるのは當然である。そして第三に爭論めいた議論を止めるように、それによって人々に智慧への愛求（哲學）に愛想をつかさせることがないように、というソクラテスへの忠告をもってこの演說は結ばれている。

この演說を支配している反主知主義、實際的な側面の强調、知的な仕事に對する報酬の辯護、教示的な調子、高い道德的な眞摯さ、ギリシャの伊達男（boulevardier）のしばしば無目的な問答法に對する厭惡、言葉の陷穽の危險に對する自覺、これらはまさしく民主主義時代の教育を指導することを使命とした老練な教師の中にわれわれが見出すことを期待するすべての諸性格なのである。これらはまた誤ってプロタゴラスの主觀主義と呼ばれたヒューマニズム攻擊に對する明快なそして完全な答えであろう。しかるにそれをプラトンが全く理解しえなかったことは驚くべきことである。というのは、このように「プロタゴラスの辯明」がなされた後に、

ところがさて、これがもしプロタゴラス自身この席にいて

同意を與えたのであり、われわれが加勢のために、かれに代ってこの承認を與えたのでなかったのなら、それはむろん、これをまたもう一度取り上げたり確かめたりする必要は少しもなかったでしょう。しかしいま實際には、われわれがかれに代って同意するなどということを越權の沙汰だとみるむきも多分あることでしょう。だから丁度いまのあのことについては、もっと頼りになる徹底的な同意というものを作るほうがよいわけです。[4]

と述べて、「辯明」に提起された非プラトン的な新しい諸論點、たとえば主知主義の拒否、實際の行爲による現實性の變更の要求、國家も個人と同じく必要とする道德的專門家の奉仕などをそれ以後全く無視して、再び獨斷的な「人間尺度論」の吟味に移っているからである。

「プロタゴラスの辯明」ないし「演說」が歷史的に眞實のものであるというシラーの解釋に對して、われわれは何を言うべきであろうか。すでにバーネットが適切に批評したように、[5] この辯明に對してプラトンがこの對話篇の爾餘の部分で少しも反論を加えていないことは事實であろう。けれどもプラトンはそれを反論すべきであったし、それをしなかったのはかれがそれを理解しなかったからだというのは、シラーの獨斷である。『テアイテトス』の意圖した問題はむしろ別にあって、「プロタゴラス演說」は尠くともこゝでのプラトンにとっては餘談であった、とも考えられるからである。のみならずかれの議論は歷史的信憑性のない假說の上に立てられている。たとえばディオゲネス・ラエルティオスによるプロタゴラスの彈劾と焚書の傳說などがそうである。これは『メノン』(九一C—E)におけるソクラテスの證言といかに調和しうるであろうか。[6] またシラーがプラトンをつねに超越論的主知主義と假定し、「プラトンの發展」における『テアイテトス』の定位について勘考しえなかったことも、かれの解釋に致命的であったと言わねばならない。けれどもかれがプラトンやアリストテレスなど反プロタゴラス主義者たちの評價や言明を離れて、新しい目でプロタゴラスを再認識しようとしたことは、シラーの沒すべからざる功績と認めてよいであろう。しかしわれわれはかれの解釋を歷史的に認證しうる道を他にもちうるであろうか。

(未完)

(1) F. C. S. Schiller, Plato or Protagoras? being a critical examination of the Protagoras speech in the

Theaetetus with some remarks upon error. 1908. do. Plato or Protagoras? (Mind. New Series. Vol. XVII 1908. p. 526)

(2) Theaetetus 166 A—C (I), 166 D—167 D (II), 167 D—168 B (III).

(3) F. C. S. Schiller, Plat. or Prot.? p. 10.

(4) Theaet. 169 E

(5) Mind. N. S. XVII 1908. p. 422 f.

(6) 「というのは、かれ（プロタゴラス）は四十年間その（ソフィストの）術に従事していて、七十歳近くになって死んだと思うのですが、かれはずっとこの年月を通じて今日に至るまで、その名聲を失わないでいるのです。そしてプロタゴラスだけでなく、他の多くの人々、すなわち、かれよりも前に生れた人も今なお生きている人々もそうなのです。」(Meno 91 E)

附記

私はさきに（本誌、第四十卷、第三號、二頁）シラーを「むしろ寡作家と言わるべきもの」と書いたが、最近Reuben Abel; The Pragmatic Humanism. Columbia University, New York 1955. を讀む機會をえて、その卷末に附せられた Selected Bibliography から、それが私の無知の告白以外のものではなく、シラーもきわめて多作家であることを知った。それによるとかれの著作には、すでに私が註記したもの以外に

Tantalus, or the Future of Man. 1924.

Ethics and Politics. 1926.

Logic for Use: An Introduction to the Voluntarist Theory of Knowledge. 1929.

Social Decay and Eugenical Reform. 1932.

Must Philosophers Disagree? and other essays in popular philosophy. 1934.

The Future of the British Empire—after ten years. 1926.

などがあり、共著の形式での論文八篇、諸雜誌への寄稿論文およそ九十篇、その外に約百五十篇に及ぶ書評がある。

（一橋大學教授）